本能寺蔵『落葉百韻』訳注（四）

伊藤伸江・奥田勲

本稿は、京都の古刹本能寺が蔵する『落葉百韻』の訳注（四）である。この注釈は、「『落葉百韻』訳注（一）」から「『落葉百韻』訳注（三）」までと同じく伊藤が下原稿を作成し、奥田とのメール会議及び複数回の対面会議で意見交換、討議を行ない、その結果を完成原稿にまとめている。なお、この研究は科研費基盤研究（C）「心敬の文学作品における創造と新撰菟玖波文学圏への影響についての総合的研究」（研究代表者伊藤、研究分担者奥田）により行なっているものである。

凡例

一、底本は本能寺蔵某年十月二十五日賦何人百韻（『落葉百韻』）である。該本は他に写本の存在を聞かない孤本であるため対校本はない。

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記にあらためて清濁を付した。原文は百韻の翻刻に示してあり、適宜参照されたい。原文の表記の誤りと考えられる箇所は改め、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が括弧書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いている。校注者による改訂部分のうち、特記すべきもの

は、注釈内に付記した。

一、各句には、百韻全体の通し番号を句頭に示し、参考として、各懐紙内でのその句の所在を懐紙の順、表と裏の別、表裏ごとの句の番号で表し、前句を添えた。

一、語釈にあげる和歌、連歌例は、後述引用文献に依る。百韻の読解に有効な際には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。私に清濁を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じ平仮名に改めた。

一、各句には、【式目】【作者】【語釈】【現代語訳】の説明項目を設けると共に、二句一連の連歌の中で句がどのように作用するか、及び独立した一句ではどんな意味を持つかに配慮し【現代語訳】の他に【付合】【一句立】の項目を設けた。さらに必要な場合には【考察】【補説】【他出文献】の項目も設けた。

※本訳注（四）の引用文献典拠一覧及び参考文献は、同時に刊行される『愛知県立大学　説林』六〇号掲載の「本能寺蔵『落葉百韻』訳注（六）付・考察及び式目表」にまとめて掲載する。参照を願うものである。

（三折　表　一）　やすきかたなきそはのかけはし

五一　鳥も居ぬ古畑山の木は枯れて　　心敬

【式目】　冬　鳥（動物）　山（山類・体）　山與山（可隔五句物）　山與山之名所（可隔五句物）　木與木（可隔五句物）　木（植物）

【作者】心敬

【語釈】●鳥も居ぬ　鳥もいない。山中で人声のみならず鳥の声もしないことは、心敬の好んだ寂しさの表現であった。

「「思ひたえまたじとすれば鳥だにもこゑせぬ雪のゆふぐれの山」さびしさにたへかね、とはぬ人のいまさらまたれ侍る、たゞ雪の底の夕にたへかねたる感情をいへり。」（芝草句内岩橋下）。「さびしさは花もにほはず鳥もゐず苔にふりたる園の秋風」（草根集・秋園・五八〇五・宝徳元年七月十八日）。なお、やや似た表現として第十二句に「嵐吹く日は鳥も音せず」（伝芳）がある。●古畑　山地において、雑穀の輪作に耐え得なくなったので、しばらく放置された畑。充分な時間を経た後、焼き払われあらためて畑となる、焼畑である。「古畑を焼くや煙の年越えてそのまま峰に霞たなびく」（今川氏真詠草・一七）。中世においては「畑」は木を伐採してその後につくる焼き畑を意味し、屋敷に近接し田地と併称される「畠」とは区別されたという。「畑トアラバ、やく」（連珠合璧集）。また、連珠合璧集では「畑」を山類と分類する。次に挙げる西行歌の語句をもととし、十五世紀の連歌にも多く詠まれている語句。「古畑のそはの立木にゐる鳩の友呼ぶ声のすごき夕暮」（新古今集・雑中・一六七四・西行）。「きしをとゞろと波やうつらん／古畑にまかぬ種ある初尾花（宝徳四年千句第六百韻・六六／六七・宗砌／日晟）。「風うちそよぐ山のかたはら／ふる畑にたてるかれ柴散やらて」（吾妻辺云捨・冬・五五五／五五六）。「砧を遠みひとり打つ音／古畑の麓の村はかすかにて」（竹林抄・雑上・一二二六・心敬）。「深山がくれに鳩の鳴く声／庵むすぶ岨の古畑秋暮れて／風もすさまじ渡る梯」（三島千句第四百韻・五二／五三／五四）。●古畑山　和歌、連歌共に他に用例が管見に入らないが、耕す人もなく荒れ果てた焼畑が残っているばかりの山といった意味であろう。●木は枯れて　（落葉樹が葉をすべて落として）枯れ木となって。この木は西行歌の「立木」を念頭に置いている。「花橘のうつろへる暮／程もなく枝に霜置く木は枯れて」（川越千句第五百韻・二二／二三・印孝／宗祇）。「かへり水無瀬の宿の古道／山もとの滝もあらはに木は枯れて」（竹林抄・冬・五八三・能阿）。

【付合】新古今集一六七四番の西行歌を本歌とし、「そは」に「古畑」、「木」を付ける。「そわトアラバ、かけ路かけはし
はた　たつ木」（連珠合璧集）。

【現代語訳】（前句　容易に渡れる様子もない、けわしいがけにある梯のさまだ。）あたりはもはや、鳥もいない荒れた

古畑が残るだけの山となっていて、立木も葉を落とし枯れはててしまっていて。

【考察】この句は【語釈】の「古畑」に挙げた西行歌を本歌としている。西行のこの歌は、初心者にとって「おぼろげにてはよみ似せがたき幽玄高妙の真体をそなへり」（『耕雲口伝』）と評されており、応永期（『耕雲口伝』は応永十五年（一四〇五）成立）に評価が高かったことが知られ、西行歌への関心の高まりもあり連歌に取られていったものであろう。

第五〇句、また当句の例にあげたように、西行歌を本歌とする場合、「古畑」と「岨」等によって付けていくが、加えて「木曽の梯」へも連想していく付け方がなされている。「木曽の梯」、「木曽のかけ路」は「波と見ゆる雪をわけてぞこぎ渡るきそのかけはしそこも見えねば」（山家集・雑・一四三二）、「恐ろしや木曽のかけぢの丸木橋ふみみるたびに落ちぬべきかな」（千載集・雑下・一一九五・空人法師）が著名で、これらの歌にある、恐怖を笑いに転換させる俳諧性は、「木曽の梯」「木曽のかけ路」を付ける寄合からも感じとれようか。また、古畑に関しても、連歌作者には木曽に存するイメージがあるかもしれない。だが、心敬句は、西行歌の情景から時を経た後、鳥も飛び去り、立木も枯れてしまっている光景を詠んだ。西行は、「すごし」という詞で光景の寂しさを表現しているが、心敬はこうした形容詞は句に持ち込まず、時が経過した後の変化を描く事で光景の寂しさをあらわさんとしている。また、より広範囲の景を表出することで、前句から視界を広げ、百韻の折り返しである三折の表にふさわしく新たな展開のしやすい付けやすい句とした。なお、この付合を題材に、心敬の本歌取について、伊藤伸江「心敬と本歌取―『落葉百韻』の「古畑山」の付句から―」（『国語国文』第八〇巻第一一号・平成二三・一一）で詳しく論じている。

（三折　表　二）　鳥も居ぬ古畑山の木は枯れて

五二　雲の枝より雪ぞうち散る　　円秀

【式目】雪（冬）　枝（植物）　雲（聳物）　雪（降物）　雪如此降物（可隔三句物）　雲如此聳物（可隔三句物）

【作者】円秀

【語釈】●雲の枝　本来は「花の雲」という見立ての表現から、雲のように花が群れ咲いている枝を言う。和歌や連歌には例が少なく、ごくわずかに薄紫の樗の花に使用したようである。「樗散る一むら雲の紫をくだきて落とす野辺の山風」（草根集・樗散・三三九八）。「樗咲く花の梢や雲の枝」（大発句帳・夏・三四五〇）。ここは雲のように見える枝のさまか。雪がつもってあたかも雲のように見える枝から、雪が花のように降り落ちてくる様子であろうか。「茂りあふ木々さへ雲の枝にして天地わかぬ五月雨の比」（称名院集・五月雨・三七九）。●雪ぞうち散る　雪が散ることよ。「たまりもあへず雪ぞうち散る／冬ごもり細き松の葉かきたきて」（行助句集・八四／八五）。

【付合】前句の「鳥」から「雲」を、「木」から「枝」を出した。「花は落ちて風に随ひ　鳥は雲に入る」（和漢朗詠集・三月尽・尊敬）。

【一句立】雪がつもって雲のように見える枝から、雪が花のように散り落ちてくることよ。

【現代語訳】（前句　鳥もいない荒れた古畑が残るだけの山では、立木も葉を落として枯れてしまっているけれど。）その枯れ木に雪がつもり、あたかも雲がかかったように見える枝から、雪が花のように散ることよ。

（三折　表　三）　雲の枝より雪ぞうち散る

五三　月寒し桂に風やしほるらむ　　利在

【式目】冬（月寒し）　夜分　桂（植物）　風（吹物）

【作者】利在

【語釈】●月寒し　月の光が寒々とさえわたっている。「月寒しとて千鳥鳴くらん／霜氷る袖の川原を帰る夜に」（竹林

抄・冬・六一四・心敬)。●桂　カツラ科の落葉樹。高木で、春に枝に五ミリほどの小さな赤い花をつける。ここは月の中の桂の木。月の中には桂の木が生えているという中国の伝説に基づく。「さよふけて松のこまよりほのめくは月の桂の枝の影かも」(為忠家後度百首・木間月・三六〇)。「桂トアラバ、月」(連珠合璧集)。●しほる　元気がなくなる。ここは「風」が「しほる」と詠まれており、風が穏やかになること、静まること。「吹くからにむべ山風もしほるなりいまはあらしの袖を恨みて」(壬二集・恋・二七〇六)。

【付合】前句の、雪を花のように散らしている枝は、実は月の中の桂の木の枝だったのだとなぞときをした付けであろう。「雲居より散りくる雪はひさかたの月の桂の花にやあるらむ」(新勅撰集・冬・四一七・藤原清輔)。

【一句立】月が寒々と光っている。さぞかしきっと今頃は、月の桂の木に吹く風が静まっているのだろう。

【現代語訳】(前句　雲のように見える雪の積もった枯れ木の枝からは雪が花のように舞い散っているよ。)と思ったが、寒々と冴え光っている月の中の桂の木の花が散っていたのだろう。さぞや今頃は、その桂の木に吹く風も静まっているだろう。

(三折　表　四)　月寒し桂に風やしほるらむ

五四　遠き川原をふけて行く比　　伝芳

【式目】雑　川原(水辺・体)

【作者】伝芳

【語釈】●ふけて　時間や季節が進行し深まってゆくことを指す。ここでは、夜が深くなって。「ふけて行く秋のおもひもわびはつる涙なすてそでの月かげ」(式子内親王集・秋・一五四)。「ぬばたまの夜のふけゆけば楸生ふる清き川原に千鳥しば鳴く」(万葉集・九二五・山辺赤人、新古今集・冬・六四一に再録。新古今第五句「千鳥鳴くなり」)。

【付合】前句の月影と桂の木に対し、川原の上に照る月が次第に移り夜がふけていく情景にとりなした。
【一句立】遠く川原の道をたどって行くが、夜は次第に更けて行く、そんな時。
【現代語訳】（前句　月が寒く光っている。桂の木に吹く風は、静まっていることだろう。）行く先遠い川原を月が照らし、夜が更けて行く頃には。

（三折　表　五）　遠き川原をふけて行く比

五五　うからめや妹がりいそぐ夜半の空　隆蓮

【式目】恋（妹）　夜半（夜分）　妹（人倫）
【作者】隆蓮
【語釈】●うからめや　意にそぐわないことがあろうか、いやない。「思ひいでじ頼まばこそはうからめどおさふる袖ぞいとどぬれぬる」（六条院宣旨集・うらみ・七九）。「のぼればきゆる月の白雲／帰るさの都の秋はうからめや」（寛正六年十二月十四日何船百韻・五八／五九・賢盛／専順）。●妹がり　恋しい女性のもとへ。万葉語。「露霜に衣手濡れて今だにも妹がり行かな夜は更けぬとも」（万葉集・露に寄する・二二五七）。「思ひかね妹がり行けば冬の夜の川風さむみ千鳥鳴くなり」（拾遺集・冬・二二四・紀貫之）。「道遠み妹がりいそぐその駒に草とりかはんなづみもぞする」（六百番歌合・寄獣恋・一〇六〇・藤原家房）。「妹がり行けば徒歩も憂からず／つれなさのこなたに負くる恋の道」（小鴨千句第六百韻・七〇／七一・宗砌／心敬）。●夜半の空　夜の空。夜半は夜のうちで、夜中から暁にかけての時刻を言う。「おほかたの秋もふけゆく夜半の空まつに物うき山のはの月」（右大臣家歌合・夜深待月・四・藤原知家）。
【付合】前掲『拾遺集』二二四番貫之歌から、前句の「川」に「妹がり」を連想し付け、また「ふけて行く」に「夜」を付けた。「妹がりとアラバ、川風さむみ」（連珠合璧集）。

【一句立】つらいことなどあろうか、いやない。夜更けの空の下、恋しい女性のもとへ急いでいるのだから。

【現代語訳】（前句　行く先遠い川原のあたり、夜が更けて行く頃。）つらいことなどないよ。夜更けの空の下、恋人のもとへ急ぐのだから。

（三折　表　六）　うからめや妹がりいそぐ夜半の空

五六　待つ人なしと門やさらまし　　有実

【式目】恋（待つ）　人（人倫）　門（居所・体）

【作者】有実

【語釈】●待つ人なし　待っていてくれる人がいない。「待つ人なくは誰かとふべき／思はじを思ひ返して慕ふ身に」（竹林抄・恋下・八二九・心敬）。●門やさらまし　門のあたりから立ち去ろうか。「いつかさらまし深き柴の戸／とふ人をいとふ山路のあるじにて」（壁草・雑下・二一九一／二一九二）。

【付合】前句を、女性の愛情を信じて彼女のもとに急ぐ男性の幸せな境地を詠んだものとし、付句では、一転して恋人ももはやいなくなってしまった男性の状況を付句とした。

【一句立】待っていてくれる人はいないと門から立ち去ろうか。

【現代語訳】（前句　つらいことなどあろうか、いやない。夜更けの空の下、恋しい女性のもとへ急いでいるならば。）だが、もはや私のことを待っていてくれる人はいない。そのことをかみしめ、恋しい人がかつて住んでいた門の前から立ち去ろうか。

（三折　表　七）　待つ人なしと門やさらまし

五七　憑つる花も杉立つみねの庵　心敬

【式目】春（花）　杉（植物）　峰（山類・体）　庵（居所・体）　庵（一座二句物）

【作者】心敬

【語釈】●憑みつる花　たのみにしていた花。「頼みつる花さへあだに散りぬるかまれなる人を待つとせしまに」（鈴屋集・寄花恋・一二三二）。●杉立つ峰　杉の木が立つ峰。「杉」に「過ぎ」を掛けている。古今集九八二番歌が背景にあるが、心敬自身、杉木立の聳える深山の景をよく詠んでいる。若年の修行の地、比叡山を思うか。「わが庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひきませ杉立てる門」（古今集・雑下・九八二・詠み人しらず）。「涙の浮かぶ奥山の暮／花はみな杉立つ峰に猿啼きて」（吾妻辺云捨・春・五五／五六）。「ぬれつつも一木をたのむ夕時雨／杉立つ峰に帰る雲鳥」（心敬僧都百句・雑・二三一九）。

【付合】前句の「待つ」を「松」と掛け、「杉」を相対させた。「門」に「杉」を付ける。「杉立てる宿をぞ人は訪ねける心の松はかひなかりけり」（拾遺集・恋四・八六六・詠み人しらず）。「嵐吹く松をとなりの峰の庵／花と月ともいつまでか見む」（続草庵集・五八〇）。「門トアラバ、松　杉」（連珠合璧集）。「杉トアラバ、門　庵」（連珠合璧集）。一句では、誰かこの花をたよりに訪ねてきてくれるかと頼みにしていた自邸の花を言い、付合では、相手も花も、自分が訪ねていくのを待っていてくれるであろうとあてにしていたのに、相手はいないし、あてにしていた花も散りすぎたということになる。

【一句立】この花が咲いたら誰か訪ねてきてくれるかと、心頼みにしていた花も散り過ぎ、今は杉が青々と立っている峰の庵の様よ。

【現代語訳】（待っていてくれる人はいないと門から立ち去ろうか。）庵の主同様に、自分が訪ねるのを待っていてくれ

るはずと頼みにしていた花も散り過ぎていて、今は主もいない、杉が青々と立っている峰の庵の様よ。

（三折　表　八）　憑つる花も杉立つ峰の庵

五八　いつかは春に逢坂の山　　忠英

【式目】春（春）　逢坂の山（名所）　山（山類・体）

【作者】忠英

【語釈】●いつかは春に逢坂　逢坂の「逢」を春に逢うととりなし、いつかはきっと春に逢いたいとした。「よととともに清水に袖をぬらしつついつかは春に逢坂の関」（隆信集・雑三・八七四）。「わきて見ん老木は花もあはれなり今いくたびか春にあふべき」（山家集・春・九四）。●逢坂の山　近江国の歌枕。山城国と近江国の国境にある。「逢」に「逢ふ」を掛けるのが定型。逢坂山は杉林の景が詠まれ、また鶯も詠まれる。「鶯の鳴けどもいまだ降る雪に杉の葉白き逢坂の山」（新古今集・関路鶯・一八・後鳥羽院）。「送りこし月も都に帰るらん杉の葉くらき逢坂の山」（心敬集・関路惜月・一四〇）。「春に今あふ坂山の岩清水木隠れいづる鶯の聲」（最勝四天王院障子和歌・逢坂関近江・二八七・藤原家隆）。

【付合】「杉」に「逢坂の山」を付け、前句の光景を花が終わった後の様とし、次には花の春に逢いたいとした。

【一句立】いつかは春の時節に逢いたい、そんな逢坂山の光景よ。

【現代語訳】（前句　この花が咲いたら誰か訪ねてきてくれるかと、心頼みにしていた花も、もう散り過ぎ、杉の木が青々と繁っている峰の庵のあたり。）またいつか、盛りの春の時に逢ってみたい、逢坂山の様よ。

（三折　表　九）　いつかは春に逢坂の山

五九　鶯も老いぬる声はあはれにて　円秀

【式目】春（鶯）　鶯（動物・一座一句物）

【作者】円秀

【語釈】●鶯も　前句が、語釈に示した西行歌「わきて見ん老木は花もあはれなり今いくたびか春にあふべき」（山家集・春・九四）を念頭に置いて、みずからの恵まれない境遇でも、いつか春にめぐり会えたらという心境を重ね合わせたので、我と同じく「鶯も」と表現したのであろう。ただし、五八を間に置いて、「花も」「鶯も」と並べるのは、打越を嫌う原則の連歌の進行としては好ましいわけではない。●老いぬる声　春遅い頃や、初夏になっても鳴いている鶯の声。鶯は早春から秋まで鳴き声が聞かれる。「鳴く音まで猶ものうきは春をへて老その森の鶯の声」（為家集・春社・二二六）。「声あはれなり籠の内の鳥／まなづるを老いぬるまでにてならして」（成立不詳「したみづに」朝何百韻・五四／五五）。●あはれにて　「あはれ」は基本的には趣き深い意であるが、この付合では「ものあはれ」の意に移行しているか。「なさけある昔の人はあはれにて見ぬわが友と思はるるかな」（玉葉集・雑五・懐旧の心を・二六一五・伏見院）。

【付合】五八、五九と「いつかは春に逢（ふ）」「老いぬる」から、述懐の気分が漂い、六〇での句境の転換につながる。

【一句立】鶯も、盛りの時を過ぎて鳴いている声は、またものあわれに聞こえるもので。

【現代語訳】（いつかは盛りの春の時に逢いたい、そんな逢坂山の光景よ。）私と同じで、逢坂山の鶯も、老いて鳴いている声は、ものあわれだ。

（三折　表　十）　鶯も老いぬる声はあはれにて

六〇　我が身の上をわぶるとは知れ　　三位

【式目】雑　我が身（人倫）

【作者】三位

【語釈】●我が身の上　自分の身の上。「わが身の上は我も知られず／かさ重くなれるや雪の積るらん」（園塵第四・冬・七二五）。●わぶる　わびしく思うこと。「わぶ」と同意。「立ちかへり泣けども我はしるしなみ思ひわぶれて寝る夜しぞ多き」（万葉集・三七五九・中臣宅守）。普通の語法ならば、「わぶ」を用いて、「わぶとこそ知れ」あたりを使うか。「世の中をわぶる我が身は一つしていかでこころのものを思ふらん」（敦忠集・六二）。「つれづれわぶる人はいかなる心ならん」（徒然草第七五段）。「誰か身を寝覚の月に思ふらん／くれ行秋をわぶる虫の音」（延徳二年九月二十日山何百韻・三五／三六・宗益／重須）。

【付合】鶯の老声を我が身の上を嘆くさまに転換した。

【一句立】自分の境涯をわびしく思っていると知りなさい。

【現代語訳】（前句　鶯も春を経て年老いた声で鳴くのは、ものあわれだ。）それによって、実は老いてしまった我が身を嘆かなければならないのだ。

（三折　表　十一）　我が身の上をわぶるとは知れ

六一　残るさへはかなき野べの草の露　　正頼

【式目】秋（露）　野辺（一座二句物（連歌新式追加並新式今案等））　草（植物）　露（降物）　露如此降物（可隔三

句物）

【作者】正頼

【語釈】●残るさへ　残っているのさえも。「残るさへ猶ぞさびしきさ夜ふけてかげかすかなる閨の灯」（延文百首・夜灯・二九九二・藤原行輔）。●野辺の草の露　野原の草に置いた露。草の露により、秋を感じる。「今朝の風此夕暮の草の露かはれる色に秋は来にけり」（夫木和歌抄・六帖題・三八五一・藤原為兼）。また露はもともとはかないものの象徴。「露トアラバ、野　草　命」（連珠合璧集）。「影ひろし秋の千里や月の庭／さかきを野辺の百草の露」（小鴨千句第六百韻・発句／脇・専順／心敬）。

【付合】「我が身の上」を露の境遇とし、説明を加えた。「終に身をやどしはつべき浮き世かは／わが老い末や草の上露」（寛正六年正月十六日何人百韻・五九／六〇・行助／心敬）。

【一句立】残っているものも、落ちてしまったものと変らぬほどはかない、野辺の草の露。

【現代語訳】（前句　自分の境涯をわびしいと自覚しなければならない。）残っているものでさえ、はかなく今にも消えそうな、野辺の草の露と同じなのだ。

（三折　表　十二）　残るさへはかなき野べの草の露

六二　やどりし月もむなし明ぼの　　有実

【式目】秋（月）　明ぼの（夜分）

【作者】有実

【語釈】●やどりし月　露に映りやどった月。「露しげき花の枝ごとに宿りけり野原や月のすみかなるらん」（久安百首・秋・八三九・藤原俊成）。●むなし　ここは月がなくなること。

【付合】付合では、露に映じた月のはかなさを付けた。「世の中を何にたとへむ草の葉の露に宿りて見ゆる月影」（能宣集・二五三）。一句では、空にやどる月であり、大空を「むなしき空」と呼ぶことから、空がむなしいのに加え、明るくなってくれば、月もむなしくなっていくとの意味で「月も」と表現している。「雲はれてむなしき空にすみながらうき世の中をめぐる月かな」（新古今集・釈教・菩薩清涼月、遊於畢竟空・一九五二・寂然法師）。

【一句立】空に宿った月も、空がしらんでくると共に、はかなくむなしく消えていく明け方。

【現代語訳】（前句　残っているものも、落ちてしまったものと変らぬほどはかなく、今にも消えそうな野辺の草の露。）その露に映じた月も、露同様にむなしく消えて行く、そんな夜明け方。

（三折　表　十三）　やどりし月もむなし明ぼの

六三　夢かへる仮寝の床の秋の風　　隆蓮

【式目】秋（秋の風）　夢（夜分）　床（居所・体）

【作者】隆蓮

【語釈】●夢かへる　夢が覚めて、夢の中で見た光景が消え去っていくこと。「葛の葉の恨にかへる夢のよをわすれがたみの野べの秋風」（新古今集・雑上・一五六五・皇太后宮大夫俊成女）。「さめて聞く山の嵐もをくらずはひとりや夜半の夢かへるらん」（草根集・山家夢覚・八三二五・享徳二年十一月七日詠）。「葛のはふいがきの松の風こえて／一夜の秋や夢かへるらん」（紫野千句第九百韻・九五／九六・周阿／全誉）。「ともなふ方にたづぞ鳴立つ／夢かへる此夜は明て跡もなし」（表佐千句第一百韻・五〇／五一・承世／甚昭）。「夢トアラバ、かへる　凡夜之詞可付之」（連珠合璧集）。●仮寝の床　旅先などで寝る、ふだんと違う床。「仮寝の床は夢も定めず／端近くたのめし宿に待更て」（竹林抄・恋上・七三三・心敬、新撰菟玖波集一四九一／一四九二）。

●秋の風　床に吹く夜の秋風は夢を吹きちらすものとされる。「敷たへの枕に残る露はあれど夢をとどめぬ秋の風かな」（師兼千首・枕辺露・三五一）。「見る夢も驚きあへぬ秋の風／枕訪ふ夜の月の寒けさ」（新撰菟玖波集・冬・一一七四／一一七五・菅原在数）。

【付合】「むなし」に「床」を付けた。「里は荒れぬむなしき床のあたりまで身はならはしの秋風ぞ吹く」（新古今集・恋四・あひてあはぬ恋の心を・一三一二・寂蓮）。「床トアラバ、むなしき」（連珠合璧集）。「むなしき床」からは、恋人が去ってしまった悲しみも感じ取れる。隆蓮の句は、「床」「秋」と下に恋の意味を感じられる語を使っており、六四句から恋に展開することが可能な流れも持った一句であった。

【一句立】その冷たさに旅寝の夢も覚め、今まで見ていた人も物もすべて帰って行ってしまう、秋風よ。

【現代語訳】（前句　空に宿った月も、空がしらんでくると共に、はかなくむなしく消えていく明け方。）吹きくる風の冷たさに、旅寝の夢も覚めて消えていってしまう、そんな秋の風が吹くことよ。

（三折　表　十四）　夢かへる仮寝の床の秋の風

六四　舟に聞く夜の波はすさまじ　　毘親

【式目】秋（すさまじ）　舟（水辺・用）　波（水辺・用）　夜（夜分）

【作者】毘親

【語釈】●すさまじ　寒々しい。冷え冷えする。「秋の心、すさまじ」（連珠合璧集）。「大方秋のさむきをいへる也」（分葉）。また、荒れてものすごいの意味もある。「夢ぞなきいかりおろしてねぬれども舟うつ波のすさまじき夜は」（亜槐集・舟・一一四一）。「秋風を浦の苫屋の旅枕／舟いでがての波はすさまじ」（表佐千句第一百韻・一七／一八・甚昭／専順）。「秋の夜もなかばと鐘や音すらん／舟にねぶれば波もすさまじ」（葉守千句第五百韻・三三／三四・宗長／宗祇）。

【付合】前句の「仮寝の床」を舟上の床に見て、水辺の景に転換した。前句に漂う恋のイメージを採用しなかったために、秋の五句目となる。次の句は必ず句境の転換を迫られる。

【一句立】舟に乗っていて聞く夜の波音は寒々としている。

【現代語訳】（秋風が吹きこんできて、寒さに仮寝の床の夢から目覚めると、　その風の強さに、舟に乗っていて聞く夜の波音は、寒々しく聞えてくるのだ。

（三折　裏　一）　舟に聞く夜の波はすさまじ

六五　如何なれや縄たく海士のぬれ衣　　利在

【式目】雑　海士（水辺・用）

【作者】利在

【語釈】●如何なれや　どのようであろうか。●縄たく海士　縄をたぐりあやつる海人。「たく（綰く）」は、舟等をあやつること。「大船を荒海に漕ぎ出でや船たけ我が見し児らがまみは著しも」（万葉集・一二六六）。「思ひきや鄙の別れにおとろへて海士の縄たきいさりせむとは」（古今集・雑下・九六一・小野篁）。「縄たく海士のさぞな苦しき／息の緒のおのが思ひにむすぼほれ」（行助句集・一八二五／一八二六）。●ぬれ衣　潮水で濡れた海士の衣服。「行く年を雄島の海人のぬれ衣重ねて袖に波やかくらむ」（新古今集・海辺歳暮・七〇四・藤原有家）。「うらかけて行く雲の一かた／村雨も運ぶ潮干のぬれ衣」（親当句集・六〇五／六〇六）。「ぬれ（濡れ）」はもちろん涙を含意する。

【付合】前句の「舟」に「海士」、「波」に「ぬれ衣」と縁ある詞でつないだ。「海人トアラバ、舟、衣」（連珠合璧集）。

【一句立】縄をあやつり、船をすすめていく海人のぬれた衣はどのようになっていることだろう。

【現代語訳】（前句　舟に乗っていて聞く夜の波音が寒々しく聞えてくる。）　縄をあやつり、船をすすめていく海人の

衣はいったいどのくらい濡れていることだろう。

【考察】六五句の本歌となる『古今集』九六一番歌の歌語「海士の縄たき」については、『奥儀抄』、『顕注密勘』、『袖中抄』等に言及がある。例えば、『袖中抄』は「顕昭云、あまのなはたきとは、あまの縄てくるといふ詞なり」と述べる。

（三折　裏　二）　如何なれや縄たく海士のぬれ衣

六六　恋路も鄙の長路をぞ行く　　心敬

【式目】恋（恋路）

【作者】心敬

【語釈】●恋路　恋の行方を道に見立てた語。恋の行方。恋の道。「まだしらぬ恋路に深く入りしより露分衣濡れぬ日はなし」（林葉集・初恋・六六七）。連歌では、宗砌がよく使うゆえ、心敬も対抗して詠み試みたか。「ふけ行沓のをとはかくれず／我こひぢつまづく駒も心あれ」（小鴨千句第一百韻・八二／八三・心恵（心敬）／宗砌）。「稀にも逢はぬ仲の遥けさ／唐土の夢より疎き恋路にて」（新撰菟玖波集・恋中・一七七五／一七七六・一条兼良）。●鄙の長路　鄙は都から遠く離れた地方のこと。「ひなとは田舎をいふと侍る。（中略）えびすの境ならねど都遠きほどをば詠めり。」（袖中抄）。鄙の長路は田舎から都への長く遠い道のり。「あまざかる鄙の長路ゆ恋ひくれば明石の門より大和島見ゆ」（万葉集・二五六・柿本人麻呂、新古今集八九九に再出、ただし第三句「漕ぎくれば」）による語句。『万葉集』、『新古今集』いずれの集の第三句も心敬は知っており、それを縁にして句を作ったか。「まつらめや出でて程ふる都人／鄙の長路の初雪の頃」（宝徳四年千句第七百韻・七一／七二・日晟／宗砌）。「身にとまれ鄙の長路の末までは伝へ聞かれむ恋の風かは」（草根集・恋・一〇五五四・長禄二年十月二十日詠）。

【付合】六五句語釈に掲出した古今集九六一番歌により、「縄たく海士」に「鄙」を付けた。海士の「ぬれ衣」を恋の

思いに涙で濡れた衣ととり、恋の句に転換した。「縄たく海士」と「鄙の長路」は共に万葉詞ないし古風な用語であり、付合としての対応を考慮したか。なお、「鄙の長路」には前句の「海士」と「鄙の長路」の枕詞の「あまざかる」との同音の縁も考慮されているかもしれない。

【一句立】恋の行方の道も、田舎から都への道のような、遠くつらい道のりをたどるのだ。

【現代語訳】（前句　縄をあやつり、船をすすめていく海人の、かなわぬ思いの涙の落ちる衣はどれほどぬれそぼっていることだろう。）　恋の道も、田舎から都への道のような、遠くつらい道のりをたどるのだ。

（三折　裏　三）　恋路も鄙の長路をぞ行

六七　忍ぶ仲よそに知らぬを便りにて　　忠英

【式目】恋（忍ぶ仲）

【作者】忠英

【語釈】●忍ぶ仲　恋をしていることを人に知られぬよう隠している仲。「分け入らむたつきも知らず忍山しのぶ中には道だにもなし」（菊葉集・寄山恋・一〇五九・菊亭実直）。●よそに知らぬ　他の人にはわからない。当人だけがわかっている。「よそにしらぬ人のけしきはさもあらばあれ一人心の月を見るかな」（拾玉集・唯独自明了・二五〇四）。「言ひ出でぬ我が身の憂さのいかばかり／老いのあはれはよそに知らめや」（新撰菟玖波集・雑四・三一三五／三一三六・西園寺実遠）。●たよりにて　よりどころとして。「霞さへ忍ぶ夕べのたよりにて／たのむとすれど猶も訪ひ来ず」（熊野千句第九百韻・三九／四〇・元説／宗祇）。

【付合】困難な長い道のりの恋路の例として、光源氏と藤壺の関係のような、人に知られれば終わってしまう忍ぶ恋の間柄をあげる。

【一句立】人に知られてはならない恋の関係は、他の人に気づかれていないということをよりどころにして続けていくのだ。

【現代語訳】（前句　恋の道も、田舎から都への道のような、遠くつらい道のりをたどるのだ。）人に知られてはならない密かな間柄は、自分たちしかその関係を知らないことをよすがとして続けていくわけだから。

（三折　裏　四）　忍ぶ仲よそに知らぬを便りにて

六八　一句分空白

（三折　裏　五）

六九　とにかくに涙ひまなき夕ま暮　　日明

【式目】恋（涙）

【作者】日明

【語釈】○とにかくに　いろいろと。何やかやと。「ただとにかくにあだし世の中／つれなきものこりははてぬ身をわびて」（小鴨千句第七百韻・九六／九七・之好／心敬）。○ひまなき　絶え間のない。「見せばやな涙ひまなきわが袖に月は夜な夜なやどるならひを」（永享百首・寄月恋・六九八・後花園天皇）。○夕ま暮　夕暮れの、薄暗い時。京極派和歌に取り入れられ、正徹が非常に好んだ語句。「夕ま暮それかと見えし面影もかすむぞかたみ有明の月」（草根集・春恋・四四四四）。

【付合】前句一句分が懐紙では空白になっており、わからないが、恋の句が連続しているはずである。ここは恋の句の四句目となる。待つ人が来ない夕暮に嘆くさまであろう。

【一句立】いろいろと心乱れることが多くて、しきりに涙がこぼれる、あたりも薄暗くなってしまった夕暮れ時よ。
【現代語訳】（前句　不明　）いろいろと心乱れることが多くて、しきりに涙がこぼれ落ちる、薄暗くなってしまった夕暮れ時よ。

（三折　裏　六）　とにかくに涙ひまなき夕ま暮

七〇　松に風吹き猿の啼く山　　心敬

【式目】雑　松（植物）　猿只一　ましら一（一座二句物）　猿（非山類）　山（山類・体）　山与山（可隔五句物）
【作者】心敬
【語釈】●松に風吹き　心敬は、夕暮れ時の松風は特に感情に訴えるものと詠む。「夕暮れは身にしむ色の松の風誰に憂かれと秋を添ふらん」（心敬集・松風秋近・三七三）。●猿の啼く　猿の鳴き声は古来漢詩において心をひきさかれるような寂しい思いをさせるものとされてきた。「巴猿三叫　暁行人の裳を霑す」（和漢朗詠集・猿・四五七・大江澄明）。「さらぬだに夕さびしき山里に／嵐のそこに猿の鳴く声」（河越千句第四百韻・一一／一二・満助／中雅）。「涙の浮かぶ奥山の暮／花はみな杉立つ峰に猿啼きて」（吾妻辺云捨・春・五五／五六）。正徹は夕暮れの雨に「猿叫ぶ」声を非常によく和歌に用いており、心敬にも影響が及んでいよう。「たへて聞けみやまの鳥と松の風夕べの雨に猿さそふ（国歌大観本では「さけぶ」）声」（草根集・山家・一一四八・享徳二年三月六日～九日、日吉社宝前詠百首）。
【付合】恋の前句から「松」（待つ）を出し、句境の転換のきっかけとした。「とにかくに」涙が落ちる理由となる哀れな物音を二つ並べて出した形であり、心敬がよくする、具体的な事物で句を構成して前句の句境を説明する形の句である。
【一句立】松に風が吹き、猿が啼く、そんな物音しかしない、うら寂しい山の中。
【現代語訳】（前句　いろいろと心乱れることが多くて、しきりに涙がこぼれ落ちる、薄暗くなった夕暮れ時。）　松に

風が吹き、猿が啼く、ここは、そんな物音しかしない、うら寂しい山の中なのだ。

（三折　裏　七）　松に風吹き猿の啼く山

七一　捨つる身は木かげ岩がね宿として　毘親

【式目】釈教（捨つる身）　宿只一、旅一、やどり此外にあり。鳥のやどり・露のやどりなどの間に又有べし。（一座二句物（連歌新式追加並新式今案等）　宿（羈旅）

【作者】毘親

【語釈】●捨つる身　出家の身。世を捨てた身。「捨る身は木深き陰に庵下て／うき世の月よ見えじ眺めじ」（竹林抄・秋・四六六・専順）。「うらみなき世に今ぞあひぬる／捨る身は君が恵も何かせん」（心玉集・一五一四／一五一五）。●岩がね　根を大地におろしたようなごつごつした岩。水辺の情景としても、深山の情景としても詠まれる。『万葉集』に多く見られる万葉詞。『万葉抄』（伝宗祇）は『万葉集』四五番歌を「こもりくのはつせの山は槙たてるあら山みちを岩かねの已下略之」と載せている。「岩が根のこごしき山を越えかねて音には泣くとも色に出でめやも」（万葉集・三〇一・長屋王）。「霞しく江には釣をや忘るらん／しづかにねぶる岩がねの床／更る夜に月待かぬる谷の庵」（河越千句第九百韻・八一／八二／八三・心敬／永祥／道真）。

【付合】前句の「山」に「捨つる身」を付けた。「捨身トアラバ、山」（連珠合璧集）。また、「松」からは「木かげ」、「猿」からは「岩がね」が連想される。「奥山の苔の筵の岩枕ふしうくもあるかましら啼くなり」（草根集・古山猿・九六八九・長禄元年一月二十八日詠）。

【一句立】世を捨てたこの身は、木陰やごつごつした岩をすみかとしていて。

【現代語訳】（前句　松には風が吹き、猿が鳴く、そんな物音しか聞こえない、寂しい山の中。）　世をすてたこの身は、

そんな山の中の木陰やごつごつした岩をすみかとしていて。